

いつしほ まつだいらしゅんがく
『逸事史補』に見る松平春嶽と
幕末維新の人々

- 会場 松平家史料展示室
- 会期 平成27年5月13日(水)
～6月28日(日)
- 休館日 6月15日(月)



幕末の福井藩主松平春嶽は、明治維新後、著作活動に励み、旧領福井の歴史や徳川幕府の内情など様々な逸話を書き残しました。その中でも明治3年から12年にかけて書かれた随筆『逸事史補』には、激動の幕末期の知られざる逸話や明治維新の立役者となった人々の人物評が記され、中には春嶽の鋭い批評も見られます。本展では『逸事史補』に記された人々について、彼らに対する春嶽の人物評とその関係資料などから紹介します。

とくがわなりあき

徳川 齊昭 (水戸藩九代藩主)

“齊昭公は尊皇攘夷の論を激化させて、攘夷家の巨魁であるという。(中略) 齊昭公はさすがに賢明な君主で、もはや外国人と交際しなければならないということは、すでに着目しておられた。なぜならば齊昭公が私(春嶽)に送られた書中にこうある。「外国人との交際の道は最良の方策ではない。しかし、今の時勢をどうすることもできない。貴公は、まだお若いからこれからのご参考にしていただきたい。とても攘夷など行うことはできない。ぜひ交易和親の道を開きなさい。その時はご尽力なされよ。齊昭は老年だから、攘夷の大親分になってこれまで通り世を渡ってゆくから、私は死ぬまでの主張を変えることはない。貴公にはこのことを伝えておきます。」との手紙であった。これによって外国と交易和親しなければならないということや攘夷論を行っていくことが難しいということをご存じであるのはさすがであると、私は敬服するのである。”

とくがわよしのぶ

徳川 慶喜 (江戸幕府十五代将軍)

“このたびの大政奉還の次第をあらかじめ慶喜公は私にお話下さった。「今後はどうなることか。春嶽、考えはないか」とおっしゃったから、「中々私のような愚鈍な者には考えがつきません」と答えた。慶喜公は言う。「これまではご承知の通り幕府は天下を統治し、政権を持っていた。役人は全員旗本を登用し、老中・若年寄は譜代大名を用いた。これからは、これらの弊習を破り、天下の諸侯を京都に集めて会合し、諸藩の有名・豪傑なる人を選んで、公平無私に政治を議し、執行するほかない」とおっしゃった。

さて考えると、政権は、まったく徳川氏に、以前のように将軍ではなくとも諸侯の頭として命じられるだろうという心算のようであった。”

かつかいしゅう

勝 海舟 (幕臣・政治家)

“坂本龍馬・岡本健三郎は、勝安房守(海舟)を刺殺しようとして勝宅へ参上し、天下の時勢について論を戦わせ、飽くるまで議論し、勝を負かして、その上で勝が謝れば、ことによっては勝を許し、さもなければ、一刀によって刺殺しようと思ひ詰めて勝に面会を乞うた。勝は承諾して面会し、応答したが、勝の議論はスケールが大きく、かえって二人は勝の議論に屈服して、刺殺しようとしたとその訳を話した。勝は大いに笑ったということだ。”

やまうちようどう

山 内容堂 (土佐藩十五代藩主)

“山内容堂公は、いたって正直なお方であった。だから我が意見にかなう者は十分引き立てられたが、少しでも気に入らない者は大いに疎外された。もともとは佐幕家で、幕府が衰微することを大いに心配しておられた。常に頼山陽を慕ってその書を学んだ。もともと内容堂公の父君は山陽のお弟子であった。だから内容堂公のお宅には山陽の書いた手本が数多くあったので、それによって学んだという。のちに公武が不和になったので、しきりに朝廷と幕府の和平を専務とされた。のちに幕府は見るに足らず助けるに足らないことを知って、もっぱら勤王の志が厚くなった。この人もなかなか一己の見識があって、決して家来に使役される人ではなかった。内容堂公の晩年は驕奢に流れたことが多いと誰もが言うが、私が考える

ところでも、驕慢の行いがなかったとは申しがたく、また奢りも随分強く、毎日平均すれば一日百両は消費したという。しかし他人の驕慢とは違った。なんといっても御一新の功労があった。”

いわくらともみ

岩倉具視（公家・近代の政治家）

“岩倉公の英雄は誰もが知っていることであるが、はじめ公は侍従であって、富小路敬直らと同意の人である。家茂公に降嫁なされた静寛院宮（和宮）のご婚礼などには格別に尽力なされたが、幕議は朝廷の意思を仰がず、公武ご一和どころではなくかえって混乱を生じ、幕府はとても頼りにはならないという見解が明らかになった。その後、酒井若狭守（忠義＝旧小浜藩主）や岩倉公らが閉居の命を受けた。公は京都の岩倉山に別荘があった。ここに閉居なされて囲碁を嗜まれ、日々、客と囲碁をし、大久保その他有志の者を集め、囲碁に託して密談を交わされた。そして、ついに王政復古の大業を助成されて今日の進歩に至るといふ。”

きどたかよし

木戸孝允（長州藩士・政治家、維新の三傑の一人）

“御一新の功労に知仁勇があった。知勇は大久保、智仁は木戸、勇は西郷である。この三人がいなかったら、いかに三条公・岩倉公の専心があっても貫徹することはできなかつたろう。”

“練熟家で威望といい、徳望といい、勤王の志が厚いことは衆人の知るところである。広沢（真臣）と相伯仲するとは言ったが、実際は伯仲とは申しにくい。天下の安危を一身に引き受け、第一には皇室を賛助し奉ったことは誰にも及ばない。特に天皇を補佐し奉って、内閣の参議を統御して異論や多数の論議をまとめたのは、大久保といえども及ぶものではない。木戸の功労は大久保のようにはっきりと明らかに見えるものではないが、逆に大久保以上の功労が多い。いわゆる天下の棟梁（指導者）というべきだ。”

おおくほとしみち

大久保利通（薩摩藩士・政治家、維新の三傑の一人）

“大久保参議一蔵は、後に内務卿兼参議利通であるが、古今未曾有の大英雄と申さなければならぬ。威望凛々としていることは霜のようであった。徳望は自然に備わっていた。木戸・広沢とは比べられない。胆力にいたっては世界（ここでの世界は日本国のこと）第一とも言える。私が大久保をこのように称賛するのは衆人の称賛とは違ふのである。（中略）徳川の処分、封土（領地）の奉還、廃藩置県、西京（京都）の皇居を移し、首府を東京とすること。また、函館戦争その他、外国との交際、第一には日本全国の人心を鎮定してその方向を定めた。すべて、大久保一人が全国を維持することによるものである。維新の功績は大久保をもって第一とする。世論はともあれ、大久保の功績は世界第一とする理由だ。”

さいごうたかもり

西郷隆盛（薩摩藩士・政治家、維新の三傑の一人）

“西郷の勇断は実に恐るべきものであった。世界中の豪傑の一人であるだろう。外国人はみな、仰ぎ慕ったという。兵隊が西郷に従うことは実に驚くほどである。英雄である。仁者である。この西郷を見出したのは、私の友人島津斉彬であった。（中略）西郷は初め茶坊主であったという。斉彬は深く西郷の人となりを見抜き、後に大事業をなすべきはこの人であると深く心に思われ、庭口の番人を申し付けられたということである。庭口の番人とはあまりにおかしく思うけれども、島津家にもこの例はないそうである。斉彬は、江戸の状況の報告また天下のために尽力周旋するなど秘密の事柄に西郷を用いられ、近習小姓にも知られずに庭口からじかに出入りして内々に言上させた。これは島津斉彬公の工夫である。私慶永と斉彬卿が面会して話した時、「私の家来はたくさんいるけれども、誰も役に立つ者はいない。西郷一人は薩摩の国の貴重な大宝である。しかしながら、彼は独立の気性があるから、彼を使うものは私以外にはないだろう」とおっしゃった。他には使う者はいないだろうと。果たしてその通り。実に島津君の確言と思った。”

※以上の人物評は、「現代語訳 松平春嶽著『逸事史補』」（角鹿尚計訳注・福井県観光営業部ブランド営業課発行・2011年）より引用した。

次回の展示

企画展 日本美術を解剖！模様の世界

7月1日（水）～8月23日（日）

松平家史料展示室 展示解説シート No.88
平成27年5月13日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1
電話 (0776)21-0489 FAX(0776)21-1489
担当 藤川明宏

印刷 宮本印刷